

●●●●●● 特集 いま「協同」を問う'94全国集会を終えて ●●●●●●

## さっそく次回への準備が始まることを期待して

●●●●●● 橋本 吉 広 (東海コープ協議会・研究センター準備室長)

### 1、京都から名古屋へ、そして2000年へ

11月26～27日、名古屋で開催された「いま「協同」を問う'94全国集会（名古屋集会）」は、2年前の京都集会の成果を引継ぎ、その後の運動の発展を反映し、規模においても討論の深さにおいても一歩前にすすんだ内容を作りだし、成功裡に幕を閉じました。

開催地の実行委員の一人としてホッとし、一緒に準備をすすめてきた現地実行委員のみなさんと共に成功を喜びながら、次の集會にむけバトンを渡したいと思います。

わたしは集會準備の過程で、87年の伊東での「プレ集會」に参加した時を思い起こしながら、「当時は遠くにある目標にロマンを見、情熱をわかせたが、今日では現実の實踐や政策のなかからロマンを語る事ができるし、名古屋集會もそうなるべきであろう」と提起してきました。

集會を終えあらためて感じるのは、集會はこの点で間違いなく成功したこと、そしてこの到達点をさらに先にすすめるためには、現実に立脚したさらにもっと大きなロマンが必要になっているということでした。

この集會は、2000年を迎えるまでにあと2回ほどの回を重ねることになるでしょう。それらは、21世紀の協同組合ビジョンを練る場となることが期待される訳ですが、そうした見通しに立って、今集會が作りだした成果をさっそく引き継ぎ、準備を開始することをまず希望します。

### 2、いま、を反映し、

#### 世代を越える協同の広がり

名古屋集會では、全体会での農業、教育、高齢者、女性の労働という4つの協同の實踐と今日の理論政策的課題を取り上げ、分科会では8つのテ

ーマを掲げて交流と論議を繰り広げました。それぞれが實踐に裏付けられた議論であったことは、運動発展の何よりの証明といってよいでしょう。

くわえて、集會に参加された誰もが実感したように、活動領域の広がりと共に、参加者層の広がりが目立ったことも、今集會では特筆されるべきでしょう。全体会の会場中央に陣取った高齢者事業団の年輩のみなさんの一群は集會に重みを与え、一方、今回は各大学でのチラシまきも含め学生のみなさんの参加を追求した成果もあり、若い世代の参加が集會に広がり、と明るさを与えました。課題の多様さにおいても、参加者の多彩さにおいても、私たちの協同集會は独特のひろがりを生み出しています。

全体会への問題提起のなかでわたしは、創立150周年を迎えたロッヂデール公正開拓者組合が、産業革命に基礎をおく世界市場の形成などグローバルな世界再編にむけた競争を背景としていたことを引き、WTOに象徴される、今日の新しい世界システムづくりの競争のなかでは、この競争に伍し競争に押しつぶされないで、新しい生活世界、労働世界を築くために、新しい協同が生まれてくる可能性があり、この集會に参加している人々こそ、その可能性を體現しているのではないかと述べました。

参加の広がりを、単に多くの参加があったという点ではなく、それが「いま、」を反映し、「いま、」を反映することができる集會となっていることへの確信として、21世紀への確信にしたいと考えます。

### 3、政策課題の實踐的な深まりと

#### 社会的な政策への接近

集會での討論は「實踐と政策を踏まえた集會に、という目標にふさわしく、実に現実的で、實踐的



なものとなりました。

事業拡大に伴う資金調達と組合員合意のあり方、事業団や生協の運動的、組織的蓄積を活かした高齢者協同組合の展望、地域のくらしのなかでの女性の協同での仕事おこし、保育・教育（・文化）の協同とそれらの経営のあり方、職場・企業における労働者の協同組織のあり方等々、いずれも協同組合をめぐる事業経営と組合員自治という本質問題に迫るもので、実践が果敢にそれら問題に挑戦していることを浮かび上がらせました。

そして、冒頭に「到達点をさらに先にすすめるためには、現実立脚したさらにもっと大きなロマンが必要になっている」と述べたのは、このように課題が現実的で実践的になってきているときだけに、それらをあやまらず導く新しい段階での理念やロマンが必要になっていることを実感させられたからに他なりません。

さらに、福祉、子育て・教育などに関わっては、それらの公共性と協同組合実践の意味が問われ、公的セクターと協同組合セクターの連携のあり方を模索し、公協提携・公協複合といったような新しい概念も求められているように思われました。そして、その延長上に「産業政策」の提起といった協同組合からの社会的ビジョン提示が視野に入ってきていることも、集会に示された到達点として確認しておきたい点です。

#### 4、21世紀の協同組合像にむかって

##### 柔軟な探求を

次回集会にむけたメッセージとして、最後にふ

れておきたいのは、集会のあり方、構え方の問題です。

わたしの理解からすれば、21世紀の協同組合を構想するとき、生協が生協としてしか総括されず、労協が労協としてしか展望されないならば、協同組合の21世紀ビジョンは正しく描き得ないはずで

す。わたしが座長を担当した「協同でひろく地域経済」の分科会は、実践がすでにそのことを求める段階にあることを示すものでした。三重県伊賀上野でのモクモクファームは、農事組合法人、有限会社、モクモク倶楽部といった多様な事業主体を結んだ総体として動いており、長野県下伊那の智里東農事組合法人も、農事組合法人、株式会社など事業の多角化に対応した主体の多様性を生み出しており、さらに両者共に地域のセンターの役割を担っていました。これら複合的な事業総体の運営のなかで、協同の理念や原則がどう息づき、展開されていくかが提起されたのです。

2000年は、日本でも1900年の産業組合法制定からかぞえて百年を迎えることとなります。農協・漁協・生協など個別的な運動の総括にとどまらない、20世紀協同組合運動の総括に立って、新しい世紀の協同組合像を開拓していくことが必要になっていると考えます。

今回の協同集会が、こうした課題を拓くための役割を担うために、集会に集った一人一人が、その持ち場で努力をはじめたことを訴えて、開催地からの一発信とします。